



## 伝統文化に学ぶ豊かで逞しい人間力

能楽シテ方喜多流 能楽師 大島 衣恵

「日本には能だけじゃなく沢山の伝統文化があるのでしよう。それはとても羨ましいことです。」今から八年前、能楽を熱心に学ぶ一人のアメリカ人と話しているときだった。私はアメリカのBloomingtonという街で開催されたNoh Training Projectに講師として招かれていた。約二十五名の受講生はアメリカ以外にもカナダやイギリス、マレーシアなどからの参加者もいて日本語を話せる人は数名。ほとんどの人は平仮名も読めないのだが、能の台本である謡本に書かれた毛筆の古文にアルファベットで読み仮名をつけ「A-ZU-MA-A-SO-BI-NO」（東遊びの）と朗々と謡っているのだ。二週間の滞在で私が

何よりも驚き、今も敬意を持っているのは彼らの能楽に対する真摯な姿勢と稽古への熱意である。日本人にも古くて難しいもの、と思われがちな能を、なぜこんなにも熱心に学ぼうとするんだろう、と疑問を投げかけたところ、冒頭の言葉が返ってきた。「沢山の先人の知恵が詰まったもの、それが伝統文化として今も伝えられている。それはとても強いことだ。」と。彼はニューヨークで育ち、俳優を目指して様々なステージを経験してきた。誰よりも個人的に、自分だけの表現をしたいと頑張れば頑張るほど分からなくなる。周囲も自己表現のぶつかり合いで、何だか自分が摩擦していく気がした。「能を初めて観た

時、演者全員がエネルギーをぶつけ合っているのに全体が調和している。不思議で面白いと思った。」能のウタである謡は深い息と吐からの大きな声、楽器演奏者の囁き方も負けじと掛け声とともに鼓を打つ。演者それぞれが力をぶつけ合うことで調和していき、その醍醐味を感じたという。また能を学んでいくうちに伝統の力を感じるようになったとも話してくれた。

「時代を超えて繋がっている力を感じることは精神的な支えになると思う。アメリカには伝統文化がないから。でもあまり日本人が知らないのはもったいないね。」能が精神の支えになるとは！能楽師の家に生まれ、幼少期から無意識のうちに能に触れて育った私には、とても衝撃的な言葉だった。生きていくための心の支え、それが能楽をはじめ伝統



英語能「PAGODA」稽古風景（2011.6.27）

文化にあるなどと、考えたこともなかったのだ。あまりにも当たり前にあるものの意味や価値に、人は気が付かないものなのかも知れない。

改めて言うまでもなく、日本は伝統文化大国である。そしてその多くは書道、華道、茶道、武道など「道」となっている。何かを学び極めようとするとき、日本語では「何々の道を歩む」と言う。能楽道、とは言わないが私自身も「能の道」を歩んでいる者の一人である。道には山や谷や、様々な課題があるが、迷う時には先人の知恵が案内をしてくれることがあり、先を歩む人の背中を追いかけたり、または後から来る人に追いつかれたりもする。道は自分の足で歩かなければならないが、しかし孤独ではない。多くの先人や同志と私はその道でつながっているのだから。よく日本人は無宗教だと海外で驚かれることがあるが、歴史を振り返ってみれば、伝統文化を学ぶ道が日本人の心を支え養ってきたと言えるのではないだろうか。海外で能の指導をする中で、日本では意識することのない大切なことに気づかせてもらうことがあり、有難い経験となっている。

グローバル化社会で生きるには、ローカルの部分で自己のうちに確固たるものがなければ危うい。グローバル

といつても、人間一人ひとりにはローカルな存在なのだ。自分自身や周囲の人々、育った地域や国に対する誇りや愛情、それがあからこその人を尊重し、他国の人々とも理解を深め、多様な価値観や文化を受け入れることも出来るだろう。

「能学習」に継続して取り組んでいる岡山市立三敷小学校。一五年前、当時の山本弘子校長先生より、学校の総合学習の時間にぜひ能を取り組みたい、とお話を頂いた。「子どもたちが活躍する二一世紀は国際化の時代。自国の文化を、確固たる見識と理解、誇りをもって海外に発信でき、他国の人と対等な付き合いが出来る日本人を育てたい！」との強い思いを持っておられた。それまで学校での数回の指導経験はあったが、小学校六年生八〇名を一度に指導するなど、私にはとうてい難しいことと思えた。しかし山本校長はじめ現場の先生方の温かいお支えを頂き、手探りながらも一所懸命指導すると、見聞きするのも初めての能の実技、謡と舞を八〇名の小学生が体育館で熱心に学んでくれた。六月から半年間の稽古を経て、岡山後楽園の能舞台での発表会ではどの子どもも精一杯の舞台を勤めてくれた。着物と袴の凛々しい子ども達の姿に、保護者の皆さんも感動して思わず涙ぐま

れる方もあった。この経験から能楽の稽古が学校教育で役立てることを実感することができ、その後の私自身の活動にも大きな力を与えてくれた。

学校で能の指導に当たる際、三つのポイントを意識している。まずは姿勢。正座の仕方や立ち居、能の構えと摺り足が基本だ。腰を入れる、という感覚を持たせることが重要である。腰を入れ（腰を立てるとも）、体の中心軸を意識すると集中力が高まる。能では所作のすべてのことを「型」というが、型はすなわち器で、器がしっかりしていないと中身を入れることが出来ない。人間も同じだ。姿勢を整え、体という器をしっかりと作ることで中身が入りやすくなる。ポイントの二つ目は息と発声。下腹の力で息を深く長く吐くこと。丹田の感覚がつかめると一層良い



能学習授業 岡山市立三敷小学校（2002年度）

のだが、なかなか難しいので「おへその奥」と言う子どもには少し分りやすいようだ。息という字は自らの心と書く。息は自分の心、精神状態そのままだ。息を整えることで心は落ち着き、安定する。謡では長く深い息をお腹から吐き、それに声を乗せるようにする。合唱のような裏声ではなく、お腹から大きな地声が出せると、安定した精神状態で活力を生むことが出来る。そして三つ目は能動、自分から動くこと。全員それぞれが自分の役割を能動的に力一杯務めなければ前に進まない。誰かのリードを待っていると停滞してしまうのだ。全体を察しながらも自分が皆を引っ張っていくんだ、という気持ちで全員が臨んだとき、素晴らしく調和した舞台になる。以上の三つが指導のポイントとして心がけ、能の学習を通して学んでもらいたいと私が念じていることである。

音楽の授業に和楽器を取り入れる、という国の方針が定められ、教育現場では頭を悩まされた先生方も多くおられたことだろう。音楽教育Ⅱ西洋音楽、明治時代から長きにわたって定着していた。私自身、学校で伝統音楽を習った記憶はないし、そういうものだと思っていた。しかし、大人になって考えてみると確かにおかしい。日本人が日本の伝統音楽を知らないことが当たり前とは。

そんな現状を何とかしよう、との方針で歓迎すべきことではあるが、現場の混乱は如何ばかりだったかとお察しする。この六年ほど、音楽の先生方の免許更新講習の一日を受け持たせて頂いている。日本の伝統芸能音楽は能、文楽、歌舞伎、雅楽や箏曲など、世界に類を見ないほど多彩だ。私は能楽師なので能に特化した一日講習をさせて頂いている。六年前、初めて講師を勤めた際は、受講された先生方のレポートからも戸惑いや不安が多く感じられた。しかし年々、受講後のレポートの内容が前向きで熱意を感じるものに変化している。学校現場で活用できる実技を念頭に、謡や掛け声、囃子のリズムを素手で打つてみる、など楽器がなくても能の楽しさを伝えたいと自分なりに工夫を重ねているが、何よりも現場の先生方が熱意をもって一所懸命に学び、頑張っておられることが伝わって、こちらも胸を熱くする思いだ。

近年、音楽や美術の時間が削減されているとも聞いているが、芸術活動は決して軽視してはならない。芸術家を育てるためではない。グローバル化社会の未来を担う子ども達が心豊かで逞しく育つため、芸術文化の力は不可欠であり、伝統文化の果たす役割は大きいものと確信している。